

藤原京

左京二条一坊・同二条二坊

発掘調査報告



7.3

奈良国立文化財研究所編

序

藤原宮跡は、戦前の日本古文化研究所の大極殿院・朝堂院の調査、戦後の奈良県教育委員会による国道165号線バイパス建設計画にともなう調査に引き続いて、奈良国立文化財研究所が調査を続けており、宮・京の状況が次第に明らかになりつつある。

奈良県教育委員会の調査によって、宮の外郭の位置と状況が明らかとなつたが、岸俊男氏らは、宮と古道の関係などに注目され、左右京十二条四坊の藤原京の条坊を復原されている。この案によると、宮は京の北辺から4町南に寄ることになる。これは藤原京と平城京との大きな相違点の一つであるが、この宮北方の東西8町、南北4町の地は、宮と密接に関連する地域と考えられている。とくに、この地域内の高市郡路東条里二十四条二里三十一坪は「テンヤク」の字名をもち、このあたりに典薬寮関係の施設が想定されている。

今回、林住建株式会社により宅地開発が計画されたのは、宮北面東門推定地から北に約200m、国鉄桜井線のすぐ北側で、まさにその字「テンヤク」の北半分にあたり、藤原京条坊では、左京二条一坊東北坪と同二坊西北坪にまたがり、中央を東一坊大路が通ると推定されるところである。

昭和61年4月から7月にかけて、約2600m²の発掘調査を行なった結果は、「テンヤク」に関する直接の資料は得られなかつたが、東一坊大路及び坪内の状況が明らかとなるとともに、東一坊大路西側溝から和同開珎銀鏡3枚が発見され、藤原京の調査研究に重要な知見を得ることが出来た。

この調査は、奈良県教育委員会が林住建株式会社から委託を受け、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、県教育委員会の委嘱を受けて行なつたもので、調査の実施に当たり協力いただいた林住建株式会社をはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げる次第である。

昭和62年3月

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長

岡田英男

目 次

I 序 章	頁
(1) 調査の経緯	1
(2) 調査位置	1
II 遺 跡	
(1) 調 査	3
(2) 藤原京時代の遺構	3
(3) その他の遺構	10
III 遺 物	
(1) 土器・土製品	11
(2) 屋 瓦	17
(3) 銭 貨	17
IV ま と め	19

挿 図 目 次

頁	頁		
fig. 1 調査地周辺の地形と条坊.....	iv	fig. 7 SB5105	7
(奈良国立文化財研究所、昭和34年測図 1/1000地形図の一部使用)		fig. 8 SE5160	9
fig. 2 調査地位置図.....	1	fig. 9 SK5130	10
(陸地測量部、明治41年測図 1/20000 地形図の一部使用)		fig.10 出土土器実測図 I	12
fig. 3 藤原京条坊模式図.....	1	fig.11 出土土器実測図 II	13
fig. 4 東区北壁上層図(東一坊大路)	3	fig.12 出土土器実測図 III	15
fig. 5 檜樹遺構実測図.....	4・5	fig.13 出土土器実測図 IV	16
fig. 6 SB5101(上)、SB5102(下)	6	fig.14 出土遺物実測図	17
		fig.15 和同開珎銀銭拓影	18
		fig.16 時期別遺構配置図	20

表 目 次

tab. 1 主要建物・施設規模一覧表	10	tab.2 和同開珎銀銭法量表	18
---------------------------	----	-----------------------	----

図 版

PL. 1	調査地周辺の現状（空中写真）	PL. 5(1)	建物SB5104（西から）
PL. 2(1)	西区全景（東から）	(2)	建物SB5105（南から）
(2)	東区全景（東から）	PL. 6(1)	建物SB5161（東から）
PL. 3(1)	東・坊大路SF5100（北から）	(2)	建物SB5162（南から）
(2)	清SD5110, SD5113（西から）	PL. 7	出土土器
PL. 4(1)	建物SH5101（北から）	PL. 8	出土遺物（和同開珎銀錢、陶磧、 土馬、埴輪、石獣）
(2)	建物SB5102（北から）		

例 言

1. 本書は、橿原市高殿町字テンヤク537-1ほかにおいて実施した、藤原京左京二条・坊東北坪、同二坊西北坪の発掘調査の報告である。
2. 調査は、林住建株式会社の分譲住宅建設に伴う事前調査として、奈良県教育委員会の委嘱を受けた奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部（部長 岡田英男）が実施した。
3. 調査は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の藤原宮第48次調査に該当し、遺構番号などは藤原宮の調査基準に準拠した。
4. 調査は、東区と西区とにわけて行ない、調査期間は、東区が昭和61年4月7日～6月25日、西区が6月30日～8月1日で、調査面積は約2,600m²である。
5. 調査には、主に木下正史、菅原正明、大脇潔、西口寿生、高野学が参加し、山本義孝、春日井恒の協力を得た。
6. 調査の実施にあたっては、林住建株式会社と奈良県教育委員会の協力を得た。
7. 本書の作成は、部長岡田英男の指導のもとに、調査部員全員があたり、全体の討議を経て、次のように分担して執筆した。

- I: 木下正史、II・III-2・III-3・IV: 西口寿生、III-1: 西口寿生・深澤芳樹
8. 遺構・遺物・図版の写真は井上直夫が担当した。
9. 本書の編集は西口が担当した。

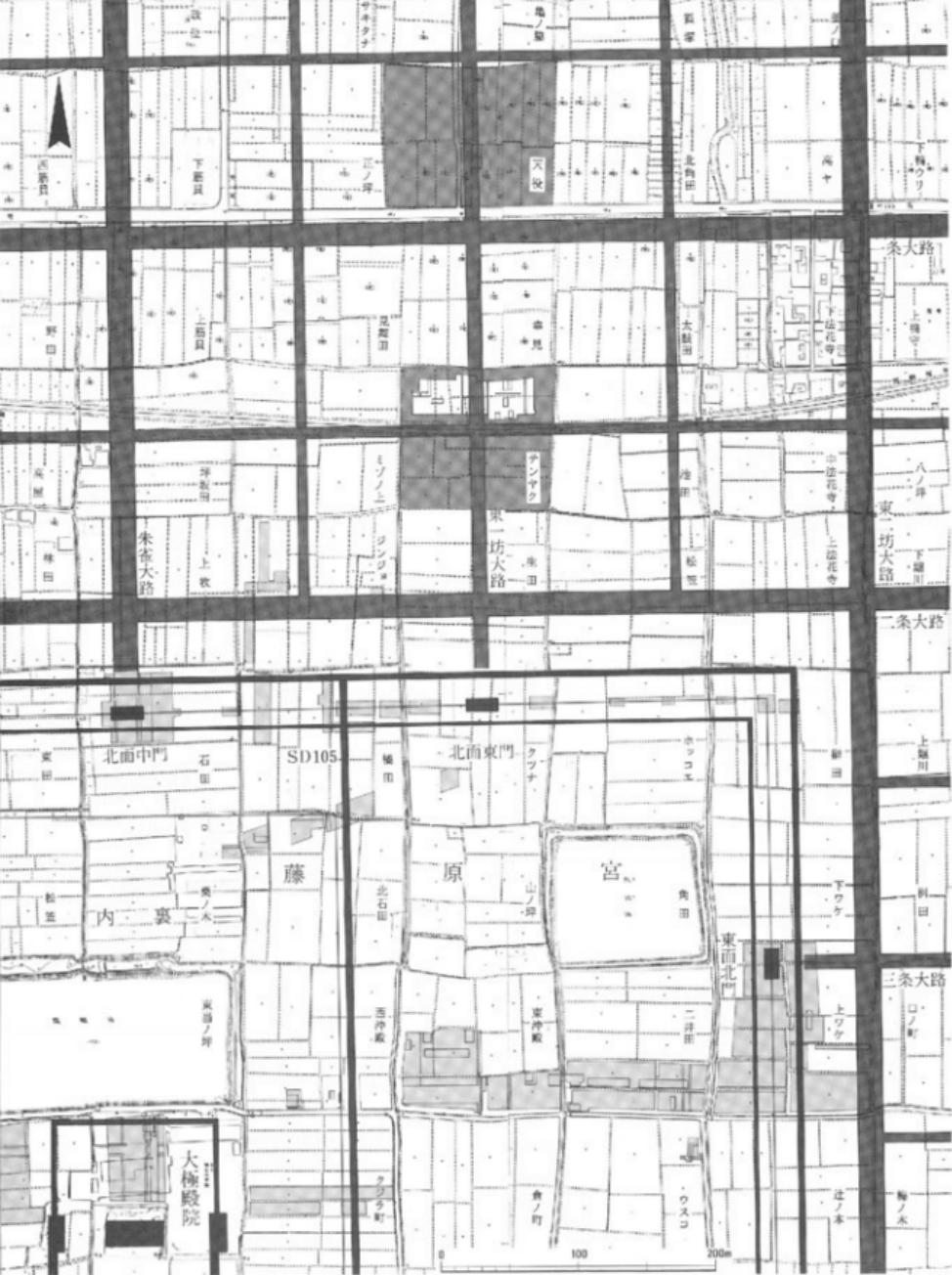


fig. 1 調査地周辺の地形と条坊（1/4000 小字名は櫻原考古学研究所編『大和國条里復原図』による）

I 序 章

1. 調査の経緯

昭和60年10月9日、林住建株式会社は、橿原市高殿町字テンヤク537-1の土地4,000m²について、分譲住宅建設に伴う発掘届を文化庁に提出した。奈良県教育委員会、橿原市教育委員会、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部、および原因者等で協議を重ねた結果、調査は奈良県教育委員会が担当し、実際の発掘調査は、その委嘱を受けて、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が実施することになった。

後述するように、申請地は、藤原京の構造の理解を左右する重要な地点であるため、十分なる発掘調査が必要と判断された。しかし、調査部では、60年度の発掘計画が予定通り進行中で、さらに続々と提出される民家新築等に伴う発掘届にも随時対応していかねばならず、広範囲の発掘を必要とする今回の申請の取り扱いに苦慮した。幸い、申請者の理解が得られ、調査は昭和61年4月から7月までの期間、これを実施する運びとなった。

2. 調查位置

調査地は、藤原宮大極殿から東北へ600m、藤原宮の北面東門から北へ200mの位置にある。調査地のすぐ南には国鉄桜井線が走り、北へ130mで、国道165号線に至る。付近一帯は、東南から西北へ向かって、緩やかに傾斜する地形であり、調査地の北350mで、大和の古道「横大路」に至り、「横大路」に沿って米川が東から西へと流れている。



fig. 2 調査地位置図(1/40000)



fig. 3 薦廩育苗地模式圖(1/40000)

国道165号線に沿う一帯は、近年開発が進行し、調査地にも、すでに宅地造成の盛土がなされていた。盛土以前の地形は、条里で区画された水田であって、大和国条里の呼称でいえば、調査地は高市郡路東条里24条2里31坪の北半を占め、昭和30年代作成の地形図によれば、北および西に段々に低くなる5筆の水田であった。旧水田面の標高は67.4mから67.7mである。

岸後男氏による藤原京の条坊復原説によれば、この場所は、藤原京左京二条一坊東北坪と、同二坊西北坪とにまたがり、申請地の中央部を東一坊大路が南北に通ると推定されている。奈良国立文化財研究所が用いている藤原京の地区表示では、6AJP-E地区に含まれる。

さて、今回の調査地を含む条里の31坪は、小字名を「テンヤク（天薬）」という。一坪あけた北にあたる33坪にも別に「テンヤク（天役）」の小字名が遺存している。これらの「テンヤク」の地名については、昭和41年～43年にわざった国道165号線バイパス計画に伴う奈良県教育委員会による発掘調査¹によって、「典薬寮」関係の木簡が出土して以来、藤原宮の「典薬寮」との関連が注目されてきたところである。

典薬寮関係の木簡群は、今回の調査地の西南方230m、藤原宮の内裏東大溝SD105が北面大傾の下をぬけて、北外濠にまさに流入しようとする、そのわずかに上流から集中して出土したものである。木簡には、「典薬」の文字の読み取れるもの、薬物の付札、薬湯の処方を記したものなどが多数あり、それらが…括弧で示されていることから、木简出土地の付近に、典薬寮関係の施設の存在が想定されたのである。岸後男・和田翠氏は、これら典薬寮関係木簡の出土地点と、「テンヤク」の小字名の遺存との関連に注目して、今回の調査地を含む藤原宮北方の2条分に、典薬寮関係の薬園等の施設、あるいは「上池」「下金池」などの小字名の遺存から苑池の存在を考え、この部分は宮の村属地であったと推定したのである。そして、中国の洛陽城や長安城の場合も、同じ部分が苑池となっていることを例示して、藤原京の構造と中国の都城の構造との関連に注目したのである。

藤原宮の北方にあたる部分については、これまで11回にわたって発掘調査を行なってきているが、いずれも発掘面積が狭く、岸・和田説の当否を検討できるような成果は得られていない。それだけに、「テンヤク」の字名をもつ地点の調査によって、藤原宮北方の利用状況について、重要な示唆が得られるものと、発掘調査の成果を大いに期待したのである。

1. 奈良県教育委員会「藤原宮」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊 1969年3月

調査日誌抄

4月7日 (晴) 東区設定、重機による盛土排除開始	6月19日 (晴) 補足調査・土層図作成
4月18日 (空) 碑材搬入	6月25日 (空) 東区調査終了
5月1日 (晴) 北排水溝より和同麻珍銀鏡3枚出土 SD5111の砂層にあたることを確認	6月28日 (空) 重機により東区埋め戻し
5月7日 (晴) 小型重機による床土排除、地区杭打ち	6月30日 (空) 西区設定、重機による盛土排除開始
5月12日 (晴) 南側から道構築検出開始、小溝多数	7月3日 (空) 道構築出発始、地区杭打ち
5月26日 (空) 引り返し北から柵検査開始	7月14日 (晴) 北側から柵査開始
6月9日 (晴) 東区検出終了、空中撮影標定点設定	7月24日 (晴) 地上写真、造り方設定
6月10日 (晴) 空中撮影、引抜き地上写真撮影	7月25日 (晴) 空中撮影、平面実測開始(～29日)
6月11日 (晴) 造り方設定	7月28日 (晴) 南拡張区地上写真、北拡張区検出
6月12日 (晴) 平面実測開始(～18日)	7月30日 (晴) 北拡張区地上写真、補足調査開始
	8月1日 (晴) 土層図作成、調査終了

II 遺 跡

1. 調 査

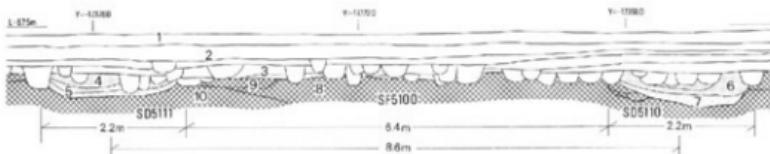
調査は、まず東一坊大路推定位置を含めた調査地の東半に、東西55m、南北28mの東区を設定し、東区の調査終了後に、残る西半に東西35m、南北27mの西区を設けて実施した。その後、建物・溝の延長部を一部拡張した結果、最終的な調査面積は約2600m²となった。

層序 調査地全域をおおう盛土は厚さ0.8~1.0mにおよび、その下の層序は、基本的に上から、水田耕作土（厚さ20cm）、床上（20~30cm）、灰褐色砂質土（20cm）、褐色粘土（地山）の順になっている。床上下の灰褐色砂質土層は比較的多くの土器類・須恵器と少量の瓦器を含む層で、旧水田面の高い調査区の東方では厚く、西方にゆくに従って薄くなっている。検出した柱穴がいずれも極めて浅いことを考えると、この層は藤原京時代の生活面の削平によって形成されたものと思われる。また、この層には間層として数層の灰色あるいは褐色粗砂層がみられ、この地が中世以降幾度も洪水にみまわれたことを窺わせる。遺構はその下の地山面で検出したが、褐色粘土層は西区を中心にして、比較的薄く広がる上層であって、東区では主にその下層の黄灰色微砂層や、それをえぐる弥生~古墳時代の自然流路の堆積層である暗灰色粘土層、あるいは灰色砂層が検出面となっている。遺構検出面は東南で高く西北に低くなっており、調査区の東端と西端との間（距離約90m）で約40cmの差がある。

検出遺構 検出した遺構には、道路、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、溝、土壌があり、時期によって藤原京時代の遺構とその他（弥生時代および中世）の遺構とに大別される。以下、その順序に従って記述するが、後者には調査区全域に東西、南北方向の小溝が多数あり、中世およびそれ以降の水田耕作にかかる溝と考えられている。東区では特に南北小溝の重複が著しく、中世以降の開発の著しい事を示すものであるが、ここでは図示記述とともに省略する。なお、遺構には一連番号を付し、遺構の種別を示すために、SA; 塀、SB; 建物、SD; 溝、SE; 井戸、SF; 道路、SK; 土壌などの記号を番号の前に付した。

2. 藤原京時代の遺構

東一坊大路とその両側溝、および大路の東と西の坪内に掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、溝、土壌などがある。以下、東一坊大路、左京二条二坊西北坪、同一坊東北坪にわけて説明する。



1:耕土 2:床上 3:灰褐色砂質土 4:暗茶褐色砂質土(溝上層) 5:灰色砂土(溝下層)

6:茶褐色砂質土(溝上層) 7:灰色粗砂(溝下層) 8:黄灰色微砂(地山)

9:黄灰色粘土(地山) 10:灰色粗砂(地山)

fig. 4 東区北壁上層図（東一坊大路 1/85）

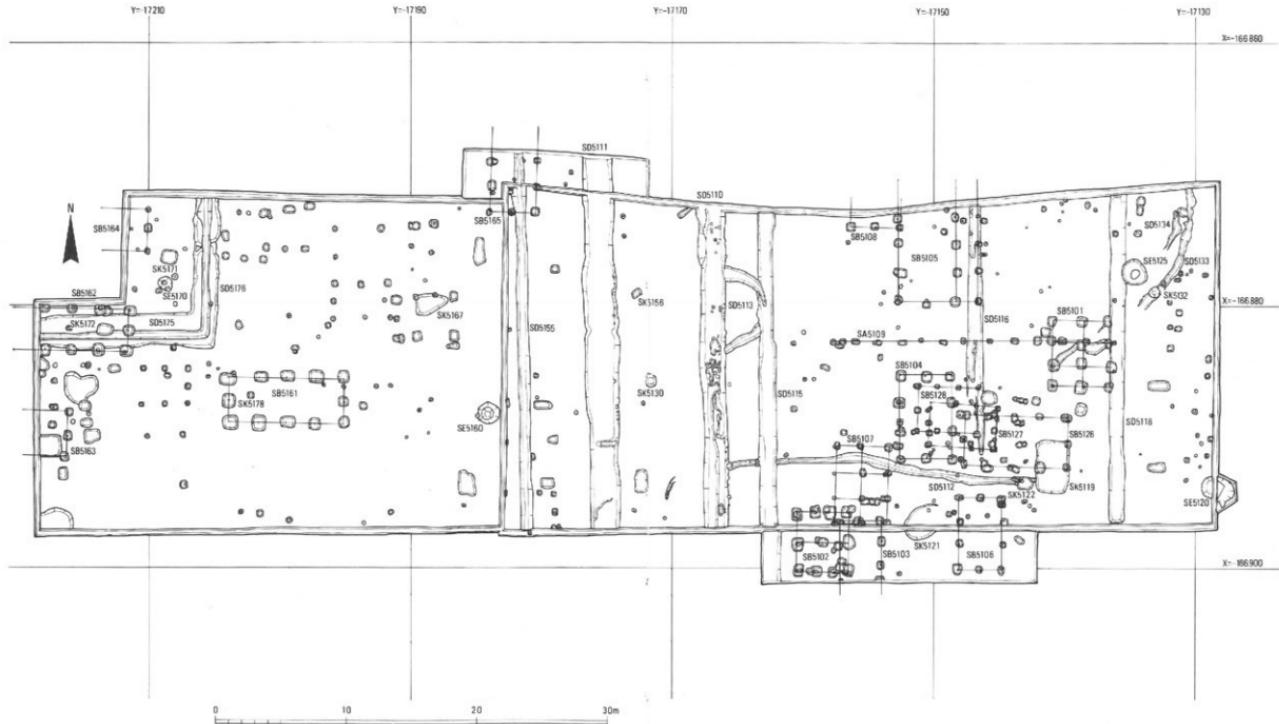


fig. 5 検出遺構実測図 (1/300)

東二坊大路SF5100 (PL. 2, fig. 4)

調査区中央を南北に貫通する2条の南北溝SD5110・5111を東西の側溝とする道路で、28m分を検出した。検出面での路面幅は6.5mで、東西両側溝の心々間の距離は8.6mである。路面上に整地上層などではなく、この時期の建物などとも重複しない。幅員は、これまで確認されている藤原京大路のうち、朱雀大路と宮周囲の大路を除く一般の大路の幅員が、約16mであるのに比べて狭く、既知の例では三条大路に類似する規模である。大路は調査区北端と南端とでは同土方限方位の北に対して約1°西に振れている。

東側溝SD5110 幅1.8m、深さ0.4mの南北素掘溝で、24.4m分を検出した。溝の横断面形が浅い皿状をなし、平らな底には流水の渦による小穴が多数あり、粗砂が詰っている。溝底はゆるやかに北へ下降し、南と北との高低差は約20cm。埋土は上下2層に大別され、上層は茶褐色砂質土で埋立土、下層は灰色砂土で流水時の堆積土とみられる。いずれにも飛鳥Ⅳ～V期の土器が含まれ、上層からは藤原宮の瓦が少量出土した。この溝の東岸には、南寄りで東西溝SD5112が流入し、北寄りに弧状溝SD5113がある。

西側溝SD5111 幅2.2～2.6m、深さ0.4mの南北素掘溝で、28.7m分を検出した。SD5110と同じく底は平らで、底での幅は1.4m。底面の南北での高低差は約17cm。溝の東岸中程を中心と護岸のための杭跡（直径10cm弱）がある。南寄りには底に、流れに直交する方向に堤防状の高まりがみられるが性格は不明である。埋土は上下2層に大別され、上層の暗茶褐色砂質土が埋立土で、下層の灰色砂や炭混じり灰色砂土が堆積土。両層から飛鳥Ⅳ～V期の土器が出土し、上層に藤原宮の瓦が含まれる点は東側溝SD5110と共通する特徴である。このほか、調査区北端の西岸に近い砂層から利同開珍銀鏡3枚が出土した。

左京二条二坊西北坪内の遺構

掘立柱建物9棟、掘立柱塀1条、溝5条、井戸1基、土壤3基がある。それらは重複関係や配置および出土遺物の検討から、1～3の3期にわかれれる。以下、各期別に記述する。

1期の遺構 掘立柱建物SB5101、SB5102、溝SD5116、井戸SE5120があり、建物は北でやや東に振れた方位をもつ。出土遺物からは藤原宮造営直前の時期とみられ、条坊道路と併存する可能性がある。

掘立柱建物SB5101 東区中央にある総柱建物。東西2間（総長4.4m、以下同じ）、南北3間（4.9m）の南北棟である。柱掘形は一辺0.7～0.9mの方形で、直径25cmの柱痕跡をもつものがある。いずれの柱穴も深さ20cm未満と浅く、若しい削平を受けていると思われる。柱間は東西2.2m等間、南北1.6m等間に割り付けられる。SA5109、SD5118より古く、柱穴から飛鳥Ⅳ期の土師器が出土した。

SB5102 東区中央南端にある東西3間（3.9m）、南北2間（4.6m）の南北棟。中央にいま一つ柱穴があり変則的な総柱建物である。柱穴は0.8～1.0mの方形で、深さ50cm。いずれも柱は抜取られているが、柱のあたりの円弧から柱径は20cmあまりとみられる。柱間は南北2.3m等間、

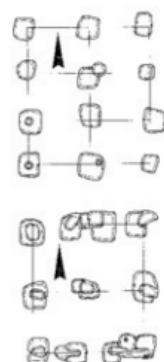


fig. 6 SB5101(上)
SB5102(下) 1/200

東西は柱列が1.2m等間、中央は1.95m等間となる。柱抜取穴から飛鳥Ⅳ期の土師器杯が出土した。重複関係ではSB5103よりも古い。

溝SD5116 SB5101とSB5102との間にある南北素掘溝。新田2条の溝が重なっているが、ともに幅0.8m、深さ25cmで南に浅くなり調査区の中程で途切れる。重複関係の新しい東の溝は15.7m分を検出し、南と北での高低差は23cmで他の溝に比べて大きい。埋土の暗褐色粘土から飛鳥Ⅳ期に対比される土器が少量出土した。SB5105の庇柱よりも古い重複関係にある。

井戸SE5120 調査区の東端にある。深くまで堆されているが、東辺に最下段の井戸枠板1枚が遺存する。枠板は幅18cm、長さ125cm、厚さ2cmで、検出面下0.7mの地山砂層に下底部をおき、井戸底は1.1mの深さにある。それから復元される井戸は、一段掘りとした掘形の上段に、方形横板組の井戸枠を設け、下段は素掘りのまま曲物を据えたものとみられる。埋土中から飛鳥Ⅲ～Ⅳ期の土器が出土した。

土壌SK5121 SB5102の東の浅い土壌。3.4×2.3mの平面橢円形。炭を多量に含む。

SK5123 SB5101の真南1.8mにある小土壌。平面は1.1×0.9mの橢円形。深さ20cm。埋土から飛鳥Ⅳ期の須恵器が出土した。

2期の遺構 掘立柱建物SB5103・5104・5105・5106、掘立柱塀SA5109、溝SD5112・5113・5118などがあり、建物等は北で西に振れた方位をもつ。

SB5103 SB5102の東に重複する梁行2間(3.2m)、桁行4間(4.6m)以上の南北棟建物。柱穴は一辺0.6mの方形で、深さは45cm。大半の柱穴に直径15cmの柱痕跡があり、柱根が残る柱穴もある。柱穴・柱の規模や特徴は2期の建物すべてに共通するものである。SB5102より新しく、SB5107より古い。柱穴から藤原宮期の須恵器などが出土した。

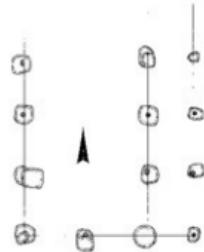
SB5104 東区中央にある梁行2間(4.0m)、桁行3間(6.3m)の南北棟建物。柱間は梁行2.0m等間、桁行は2.1m等間。内側柱列がSB5105の西側柱列と柱筋がそろう位置にある。

SB5105 東区北端にある東庇付の南北棟建物。梁行2間(4.5m)、桁行4間(6.3m)以上。柱間は身舎梁行が2.25m等間、庇の出1.7mで、桁行は2.1m等間。庇の柱穴は身舎よりも小さいが、柱痕跡は身舎と同径でその底面は身舎柱より深い位置にある。庇柱列がSD5116より新しく、身舎東側柱列がSB5106の西側柱列とそろう。柱穴から飛鳥V期の土師器が出土した。

SB5106 SB5103の東にある梁行2間(3.3m)、桁行3間(5.6m)の南北棟建物。柱痕跡がやや細い。柱間は梁行1.65m等間、桁行は北端の間が1.7mで、他は1.9m等間。北から2本目の梁行がSB5103の北妻柱列とそろう。

SA5109 SB5104とSB5105との間にある東西塀。11間(19.2m)分を検出。北側の建物SB5105と南の建物SB5103・5104・5106とを区分する位置を占める。柱穴は一辺0.5～0.7mの長方形で柱筋方向に長く、深さは30～50cmで東方の柱穴が深い傾向にある。柱間は1.5～1.9mと不揃いである。柱穴から飛鳥V期の土師器蓋などが出土し、SB5101より新しい重複関係にある。

溝SD5112 SB5104の南をやや蛇行して西流する東西素掘溝。長さ fig. 7 SB5105(1/200)



23m分を検出した。溝底東西端の高低差は10cmたらずで緩やかである。溝は中央部の一段深い二段掘りで、下層は幅0.4~0.8m、深さ20cmで底には灰色粗砂が堆積する。幅広く浅い上層の埋土は暗褐色粘土で、溝内には飛鳥V期の土器が多く含まれる。溝西端はSD5110に至り、粗砂層がSD5110の下層に流入することからSD5110と併存する溝であることがわかる。溝の東端は土壌SK5119に壟され、以東にはたどれない。また、SD5110の東を並走する南北溝SD5115より古い重複関係にある。

SD5113 東側溝SD5110の東岸にある弧状の溝。幅0.6~1.1m、深さ20~30cmで、埋土は上層の茶褐色粘土と下層の灰色粗砂とにわかれる。この粗砂層はSD5110の埋立土の下に流入し、この溝がSD5110と併存することを示している。南端はSD5110の東岸中位（底から24cm上）にあり、北端はSD5110の底から10cm上に流れ込む。この間約16cmの高低差があり流れは急である。SD5110の迂回路としての機能をもつとみられるが、SD5110の堆積層にはこの間に他との違いがないことから具体的な使用状況は明らかでない。

SD5118 東区東寄りの南北素掘溝。調査区南端に始まり、幅1.2m、深さ30cmで北流する。長さ25.2m分を検出。底面の南北での高低差20cm。埋土は大きく2層にわかれるが、底には灰色粘土が堆積しており溜水していたことを示している。これは南端での途切れ方が急なことと合わせて、溝が溜剤として機能していたことを窺わせる。なお、上層の茶褐色砂質土には飛鳥III期の土器と多量の炭が含まれるが、これは周辺に広がる土壌状の窪みにともなう遺物で、溝の時期を示すものではない。SB5101より新しくSE5125より古い。

SK5119 SD5112の東端にある長方形の大土壙。4.1×1.2m、深さ1.2m以上。暗灰色の砂と粘土が交互に水平堆積し、木片、土器片、焼けた流紋岩片などが出土した。井戸の可能性もあるが調査時の湧水が激しく確認できていない。

3期の遺構 掘立柱建物SB5107・5108・5126、溝SD5115がある。重複関係では2期の遺構より新しく、北で東に振れる方位をもつが、2期の改造にあたるとみられる。

SB5107 SB5102・5103の北に重複する梁行2間(4.1m)、桁行3間(5.9m)の総柱の南北棟建物。柱穴は一辺0.3~0.4m、深さ30~40cm。柱間は梁行2.1m等間、桁行1.9~2.0m等間。SB5103、SD5112より新しい重複関係にある。

SB5126 SB5107の東にある東区唯一の東西棟建物。桁行4間(7.8m)、梁行2間(3.4m)である。柱穴は0.5~0.7mの方形で、深さ40cm。直径15cmの柱痕跡がある。柱間は梁行1.7m等間、桁行は西端の間が1.7mで、他は1.95m等間に復元される。

SB5108 SB5105の西にある3個の柱穴で南北棟建物の南妻柱列である。柱穴は0.4~0.6mで径10cmの柱痕跡がある。柱間は1.8m等間。

SD5115 東側溝SD5110の東3.6mの位置を並走する南北素掘溝。幅1.25m、深さ25cmで、28m分を検出した。溝底の南と北との高低差は10cm足らずで緩やかな流れである。埋土は上下2層にわかれて、上層の黄褐色砂質土と下層の灰色砂土とから藤原宮期の土器が出土した。この溝はSD5112、SD5113よりも新しい重複関係にあることから3期に含めるが、振れや出土遺物の特徴は、他の2期の遺構や大路の側溝と同じであって2期に属す可能性がある。

左京二条一坊東北坪内の遺構

掘立柱建物 5棟、溝 3条、井戸 2基、土壙 5基などがあるが、削平が著しく全容の把握は困難である。以下、遺構の種類別に記述する。

掘立柱建物SB5161 西区中央にある東西棟建物。梁行 2間 (3.6m)、桁行 4間 (8.4m)。柱穴は1.0mの方形で深さ30cm。直径15cmの柱痕跡をのこすものがある。柱間は桁行2.1m等間、梁行1.8m等間。柱筋は掘形を結ぶ方位と異なり、北でやや東に振れる。

SB5162 西区西端の東西棟建物。梁行 2間 (3.2m)、桁行 4間 (6.5m) 以上。柱穴は一辺0.9mの方形で深さは60cm。いずれの柱穴にも直径20~25cmの柱痕跡があり、埋土に黄色粘土の小塊が混じる。SB5161とともに左京二条二坊での1期に対応する。

SB5163・5164 SB5162の南と北とで検出した。ともに梁行 2間の東西棟建物の東妻柱列と思われる。一辺0.6mの柱穴に直径15cmの柱痕跡がのこる。

SB5165 西区東北部にある南北棟建物。梁行 2間 (3.5m)、桁行 3間 (3.9m) 以上。柱掘形は一辺0.5m、深さ30cmで、直径15cmの柱痕跡がある。北でやや東に振れる方位をもち、3期に対応するとみられる。柱穴埋土に奈良時代初頭の上器が含まれる。

溝SD5155 SD5111の西6.0mを並走する南北素掘溝。幅1.0m、深さ25cmの断面V字形で、28.7m分を検出。南北での高低差は20cm。SB5165よりも古い重複関係にあり、2期に対応するとみられ、敷地の外側を仕切る溝と考えられる。藤原宮期の土器が少量出土した。

SD5175・5176 西区西北部の逆L字形に曲る素掘溝。幅1.9~2.5m、深さ10cmたらずで、中央部（幅0.6m）が一段深くなった二段掘りの溝である。SB5162の柱穴よりも新しく、SK5172よりも古い。埋土から藤原宮期の上器が出土したが、そのうち、須恵器擂鉢（fig. 10, 27）が東側溝SD5110出土品と直接接合し、両溝の埋没時期の近いことを窺わせる。

井戸SE5160 (fig. 7) SB5161と西側溝SD5111との間にある。

掘形は二段掘りで、上半は平面六角形の擂鉢形、下半は径0.6m、深さ0.6mの円筒形。下半中央に径30cmの曲物を据えたとみられ、周間に砂と粘土とが交互に積まれている。上半は井戸枠の抜取穴とみられるが、平面形が井戸枠の形状によるものか、抜取り方によるかは不明。飛鳥IV期の土器が出土した。

SE5170 SB5162の東北にある素掘りの井戸。検出面での平面形は1.0×0.9mの梢円形で、中程から下は径45cmの円形。深さ1.3m。藤原宮期の土器が少量出土した。

SK5171 SE5170の北の1.2×1.0mの方形土壙。深さ45cm。

SK5172 SB5162の内側にある0.8×1.0mの方形土壙。深さ90cm。埋土がほぼ水平堆積で井戸とは考え難い。SD5175より新しく、3期に対応する。飛鳥V期の土器が少量出土した。

SK5157・5167等 西区の各所に浅い小土壙があり、飛鳥IV期の土器が出土した。

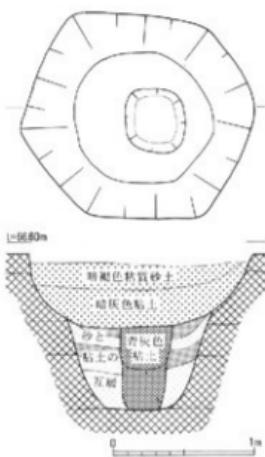


fig. 8 SE5160 (1/40)

3. その他の遺構

藤原京時代以後中世の遺構には、掘立柱建物SB5127・5128、掘立柱塀SA5129、井戸SE5125のはかに小溝が多数ある。また、弥生時代から古墳時代の遺構には土壙SK5130・5131・5132と、自然流路にかかる溝SD5133・5134がある。

SB5127 東区のSB5104などと重複する小規模な東西棟建物。3間(5.0m)×2間(3.2m)。径0.4mの柱穴に径10cmの柱痕跡がある。西北隅の柱を欠く。

SB5128 SB5127の西北に重なる3間(4.8m)×2間(3.3m)の東西棟建物。SB5127とともに小規模な柱穴で、北で東に振れる方位をもつ。

SA5129 SB5127の南にある3間(4.9m)の東西塀。建物の南側柱列の可能性がある。

SE5125 SD5118と重複する井戸で、直径0.9mの円形掘形に径0.7mの円形縦板組の井戸枠を据える。深さ1.6m以上。井戸枠内には飛鳥Ⅲ～V期の土器が含まれるが、埋土上部から瓦器片が出土し、また、井戸より新しい小溝と古い小溝とが並んで、中世の井戸と考えられる。

SK5130 (fig. 9) 東一坊大路の路面敷上にある直径0.9m、深さ

0.9mの円形土壙。埋土は4層にわかれ、その上位と中位とから弥生時代後期の土器が出土した。

SK5131 東区中央にある直径1.0mの円形土壙。深さ0.6mの擂鉢形の断面で、埋土は中くぼみに堆積する。頭部に刺突竹管文のある弥生時代後期の長頸壺などが出土した。

SK5132 東区東北部にある0.8×0.9mの楕円形小土壙。断面形が擂鉢形で深さ40cm。古墳時代初頭の上師器壺が出土した。

SD5133等 SK5132と重なる斜行溝SD5133・SD5134は、東区の東半を蛇行する自然流路の上層にあたり、弥生時代後期の土器が少量出土。自然流路には弥生時代中期の土器や石錐(PL. 8)が含まれる。

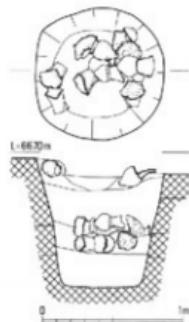


fig. 9 SK5130 (1/40)

時期	遺構番号	棟方向	柱間規模	桁行m	梁行m	庇m	備考
1	SB5101	南北	3 × 2	4.9	4.4		竪柱建物SA5109・SD5118より古
1	SB5102	南北	2 × 3	4.6	3.9		竪柱建物(中央の柱は1本)
1	SB5161	東西	4 × 2	8.4	3.6		左京二条一坊東北坪内
1	SB5162	東西	4以上×2	6.5以上	3.2		SD5175より古
2	SB5103	南北	4以上×2	4.6以上	3.2		SB5102より新、SBS107より古
2	SB5104	南北	3 × 2	6.3	4.0		西側柱がSB5105とそろう
2	SB5105	南北	4以上×2	6.3以上	4.5	1.7	SD5116より新
2	SB5106	南北	3 × 2	5.6	3.3		北から2本目の柱がSB5103とそろう
2	SA5109	東西	11	19.2	—		
3	SB5107	南北	3 × 2	5.9	4.1		竪柱建物SB5103・SD5112より新
3	SB5108	南北	2以上×2	?	3.6		
3	SB5126	東西	4 × 2	7.8	3.4		東に振れる
3	SB5165	南北	3以上×2	3.9以上	3.5		SD5155より新

tab. 1 主要建物・塀規模一覧表

III 遺物

遺物には土器・土製品、屋瓦、銭貨、金柄製品、石製品がある。その大半は土器であり、屋瓦がそれに次ぐものの少量で、ほかはごくわずかである。以下、種類別に記述する。

1. 土器・土製品 (PL. 7・8, fig.10~14)

土器は調査区全域から整理箱30箱分が出土したが、調査面積に比べて少なく、その約3割が東区の灰褐色土層出土で、西区からは少ない。遭構に伴う土器の大半は7世紀後半～8世紀初頭の土器で、東一坊大路の側溝SD5110・5111出土土器が量的にややまとまっているほかは、溝、井戸、土塙、建物の柱穴等とともに少量づつである。種類では、大部分を占める土師器、須恵器のほかに弥生土器、瓦器、施釉陶器がある。施釉陶器には灰釉、綠釉、青磁、白磁があるが、いずれも灰褐色土層出土の細片である。以下、土器を遭構別に説明し、陶碗、土馬、輪羽口、埴輪などの土製品については一括して記述する。なお、土器の時期区分、器種名、調整手法名などは『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II、『平城宮発掘調査報告』Ⅳに準拠した。

SD5110・5111出土土器 (fig.10, 1~14, 16~28) 東一坊大路SF5100の両側溝で、溝はともに上下2層に大別され、上層が埋立土で下層が堆積土にあたる。飛鳥Ⅲ期からV期までに対比される土器が含まれ、下層に古い時期の土器が多いが、主体はIV～V期（藤原宮期）の土器である。器種には土師器杯A、杯B、杯C、杯D、杯G、杯H、高杯A、鉢、壺と須恵器杯A、杯B、壺、皿A、平瓶、壺、搗鉢、壺などがある。

土師器 杯AにはA I (5)とA III (1)がある。5は底部をヘラ削り、口縁外表面をヘラ磨きするb₁手法、口径18.6cm、器高4.5cm。SD5110下層出土。1は底部ナデ調整のa₁手法で、口径12.4cm、器高2.6cmと浅い。SD5110上層。杯CにはC I、C II (6)、C III (2)がある。2は浅く底部ナデ調整で口縁外表面のヘラ磨きを省略したa₂手法で、口径12.2cm。SD5111上層。6はb₁手法で口径15.2cm、器高4.0cm。飛鳥Ⅲ期に対比される。SD5110下層。杯IIにはH II (7)とH III (3)がある。SD5110下層出土の7は、口径15.6cm、器高5.1cmと深く、飛鳥Ⅲ期の可能性がある。杯G (4)は口縁部を横ナデするだけの小型の杯で、暗褐色で金雲母を含む。杯D (8)は内湾気味の口縁で端部が内側に肥厚する。外表面にヘラ磨きを施すが、内面に暗文はない。口径14.6cm、器高3.9cm。淡褐色。SD5111下層。皿A (12・13)は口縁端部が内側に肥厚する。底部外表面を軽く削り、内面にラセン暗文と一段放射暗文がある。12は口径21.5cm、器高2.6cm。SD5111上層。13は口径22.4cm、器高2.8cm。SD5110下層。鉢 (9)は杯Dと同じ胎土で、体部外表面を横方向に削る。SD5111下層。壺B (11)は杯Gと胎土や調整が共通する粗製品。口径6.0cm、器高4.8cm。SD5110下層。10は赤褐色で砂質の胎土の脚部であるが器種は不明。壺には外面部がハケメで口縁端部外側に面をもつものが多い。ほかに、口径20cm程の中型の壺Cで、外面上に粗い平行叩き目をもつものがある。14はSD5110下層出土の小吸の壺Aで体部内面はナデ。口径12.8cmで、弧状溝SD5113出土の壺A (15)と同法量であるが、15の口縁端部は丸い。

1. 飛鳥Ⅳ期とV期とは、個々の土器については区分することの困難な場合があり、その場合ここでは便宜的に藤原宮期の名で呼ぶことにする。

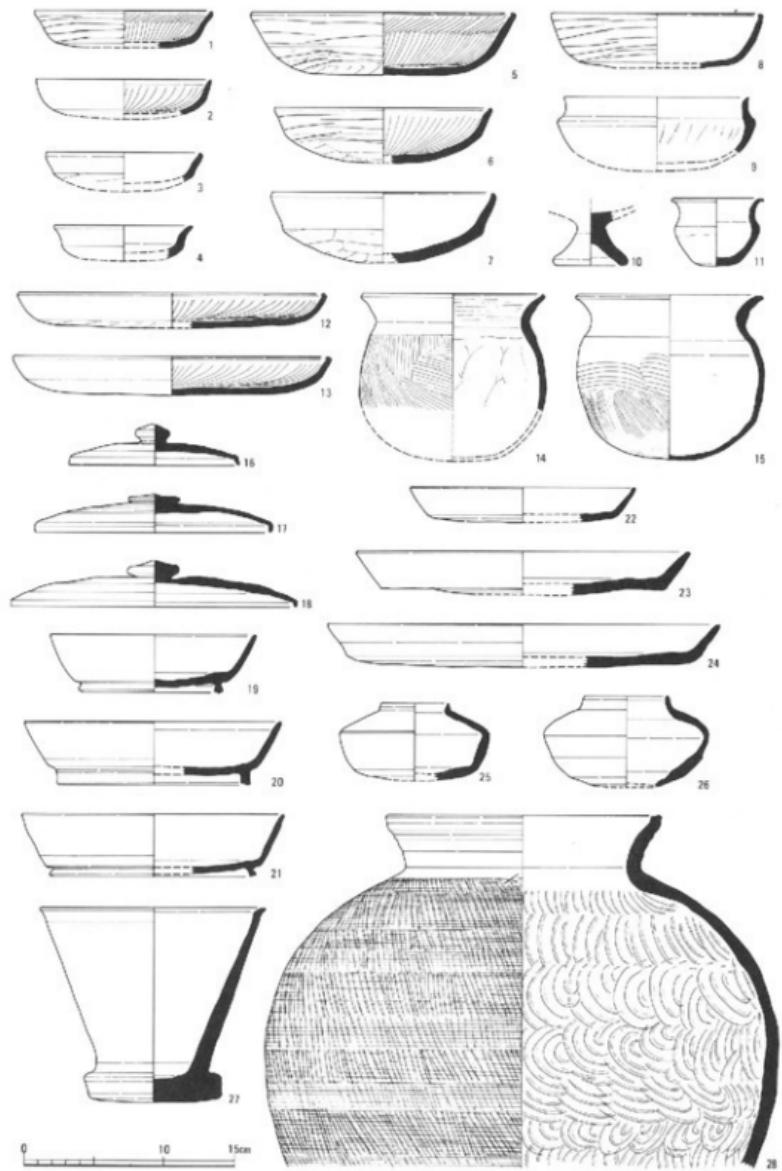


fig.10 出土土器実測図 I (SD5110・SD5111・SD5113 1/4)

須恵器 杯B(19~21)にはBⅡとBⅢがある。杯BⅢ(19)は底部ヘラ切りで、口径14.4cm、器高4.1cm。杯BⅡ(20・21)の底部はロクロ削りで、20の高台はやや高く直立気味である。いずれもSD5110下層出土。杯B蓋にはBⅢ蓋(17)とBⅡ蓋(18)がある。頂部をロクロ削りし、口縁端部は丸みをもって小さく突出する。17は口径16.5cmで扁平なつまみ。18は口径20cmでつまみは大きい。蓋(16)は口径に比して大型の宝珠形つまみがつく。内外面に残る重ね焼の痕跡から、この蓋は口径11cm、底径8cmの大きさの椀Aの蓋と思われる。皿AにはAⅠ、AⅡ、AⅢがある。AⅠ(24)は底部ロクロ削りで口径27.6cm、器高3.1cm。SD5111上層出土。AⅡ(23)の底部はヘラ切りのちナデで口径23.4cm、器高3.1cm。SD5111下層出土。ともに白色で砂を多く含む。皿AⅢ(22)は青灰色の精良土で、口縁がわずかに内済する。口径11.4cm。SD5110上層出土。壺類には、小型の短頸壺(25・26)のほかに、長頸壺、大型短頸壺、平瓶などの小片がある。25は断面三角形の小さな口縁で、平らな底部を手持ち削りで仕上げる。口径4.6cm、器高5.6cm。丸底の26はロクロ削り。SD5111上層出土。擂鉢(27)は頑丈な底部から大きく開く器形で、口径15.6cm、器高18.9cm。SD5110下層から出土した底部と西区の東西溝SD5175から出土した口縁部とが接合した。両溝の埋没時期が近いことを示す資料である。甕A(28)は口縁端部が直立し上面に面をつくる。頂部にヘラ記号がある。口径18.6cm。SD5110出土。

両側溝出土土器にはともにかなりの型式差があり、そのうち最も古いと考えられる5・6などは飛鳥Ⅲ期に対比されるが、周辺からも同時期の遺物が出土しており、これが溝の開削時期

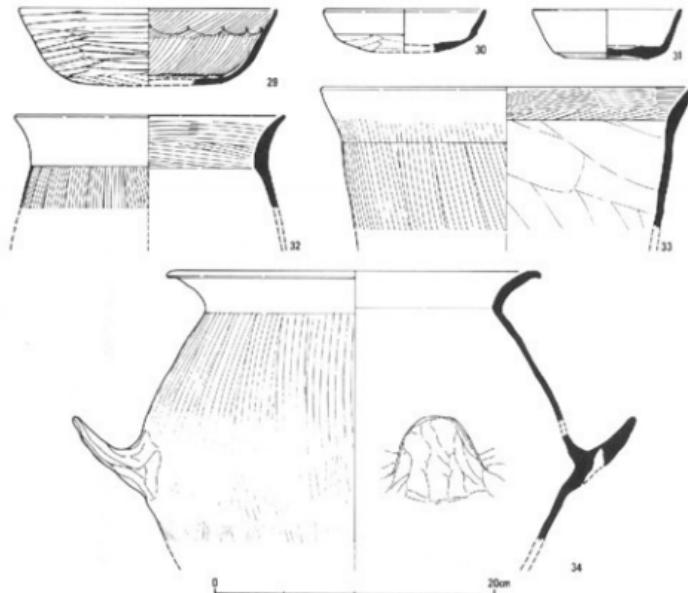


fig.11 出土土器実測図 II (SE5120 1/4)

を示すものとみることはできない。また、最も新しいと思われる1・2が飛鳥V期に対比されることから、溝の廃絶は平城遷都後間もないころと推測されよう。

SE5120出土土器 (fig.11, 29-34) 東区の横板組井戸で、枠板の内側から出土した。土師器杯A、杯C、杯II、甕A、甕B、瓶、須恵器杯A IVがあり、飛鳥IV期に対比される。土師器杯A I (29)はb手法で口縁端部がわずかに内側に屈曲し、内面には二段の放射暗文に加えて、連弧状の暗文をつける。口径18.1cm、器高5.6cm。土師器甕A (32)は口径19cmで口縁端部は小さく丸い。甕B (34)はくの字に聞く短い口縁で、丸い体部の中程に挿入式の把手がつく。甕(33)は、31と同じ茶褐色の胎土で、外面のハケメがかかる点も類似する。口径26.3cm。須恵器杯A IV (31)は底部ヘラ切りのままで、口径10.3cm、器高3.6cm。

SD5112出土土器 (fig.12, 46・47・50・51) 東側溝SD5110に流れ込む東西溝で、土師器杯A、杯C (46)、杯II、杯G、甕A (47)、甕B、須恵器杯A、杯B (50・51)、杯B蓋、皿、甕などがある。いずれも側溝出土土器に類似し、藤原宮期に属す。土師器甕A (47)は体部内面をハケメ調整し、砂を多く含む白っぽい胎土。口径12.2cm。

SD5116出土土器 (fig.12, 52・53) 須恵器杯B III (52・53)のはかは小片。ともに底部ヘラ切りで、52は口径15.3cm、器高3.7cm。口縁部との境がまるい。53は角ぼって直線的に開く。

SD5118出土土器 (fig.12, 56・57) 土師器杯C、杯H、須恵器杯G (56・57)があるが、器形の知れるものはいずれも飛鳥III期に対比される。これらは溝の周辺に広がる浅い土壌状の窪みの土器(55・58-60)と同じ内容で、溝に伴う土器ではない。また周辺に散在する小穴からは、杯C I (39)や杯H I (40)など飛鳥II期に属す土師器が少量出土しており、この時期の遺構の存在を窺わせる。なお、須恵器甕(60)の色調・胎土は土師器に似て淡褐色で軟質である。

SB5101柱穴出土土器 (fig.12, 36) 土師器杯A I (36)、杯C IIIがある。36は小片であるが、端部をわずかに屈曲させた口縁で、内面に細密な二段放射暗文がある。飛鳥IV期。

SB5102柱穴出土土器 (fig.12, 37・38) 柱掘形から土師器杯C I、高杯(38)が、柱抜取穴から土師器杯A I (37)が出土した。37はほぼ完形の個体で口径17.6cm、器高4.0cm。内面に二段放射暗文とラセン暗文があり外面を密に磨く。形態・手法から飛鳥IV期に対比される。

SB5103柱穴出土土器 (fig.12, 49) 須恵器杯B III (49)がある。底部はヘラ切りののちにナデ、口径13.9cm、器高4.0cm。藤原宮期。

SB5105柱穴出土土器 (fig.12, 43) 土師器杯C II (43)がある。a手法で口径12.9cm、器高3.3cmとやや深い。暗文も細かく飛鳥IV期に対比されよう。

SB5107柱穴出土土器 (fig.12, 48) 須恵器杯B II 蓋(48)がある。端部の突出が小さい。

SB5109柱穴出土土器 (fig.12, 35) 土師器蓋(35)は中凹みの扁平なつまみがつき、口縁端部は平たく肥厚する。頂部をヘラ磨きするが、内面の暗文は不明。口径23.5cm。飛鳥V期。

SA5165柱穴出土土器 (fig.12, 41・42) 土師器杯A IV (41)、杯C I (42)、杯B、鉢、甕などがある。41には内面に一段放射暗文と連弧状暗文があり、奈良時代初頭に位置づけられる。

中世小溝出土土器 (fig.12, 61-74) 個々の遺構は省略するが、小溝からは土師器小皿、瓦器などが出上し、それらは10世紀前半代に位置づけられる土師器甕(71)を除けば、13世紀中頃、

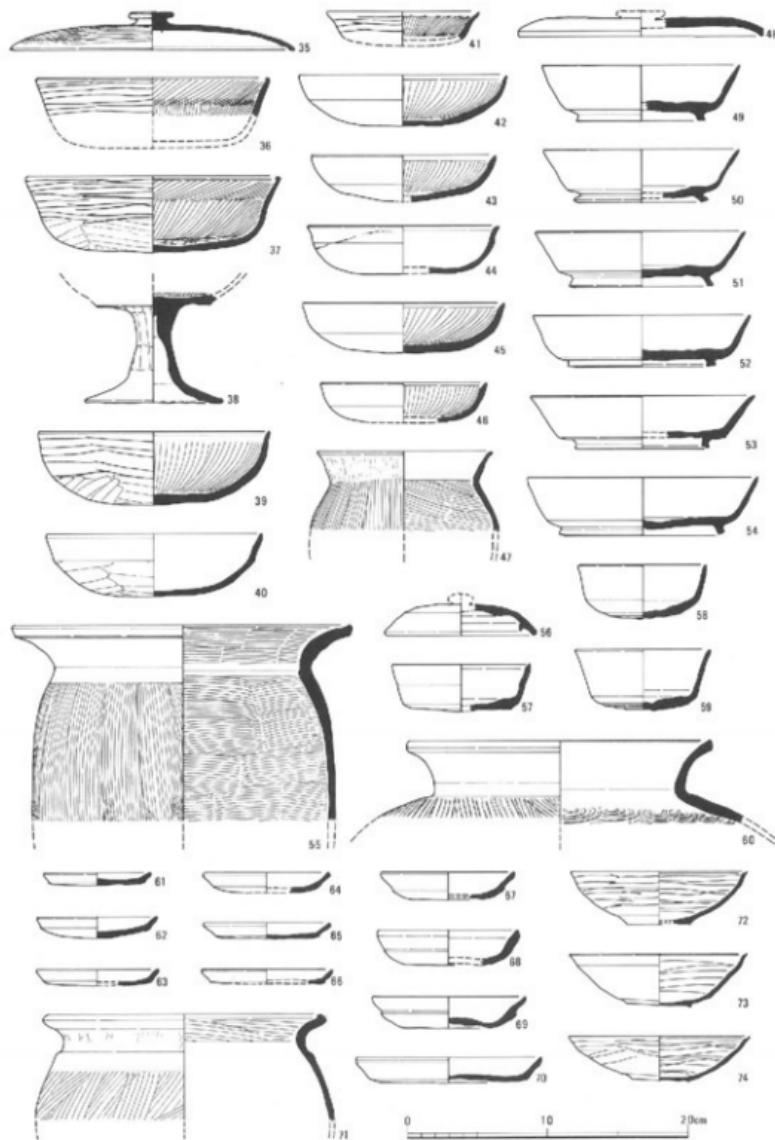


fig.12 出土土器実測図 Ⅲ (溝・井戸・土塙・建物等 1/4)

同後半、同末、14世紀の各時期にわたっている。水田化の時期を10世紀代におくか否かはともかく、13世紀代には、この地域の水田耕作が経常的に行なわれていたことが窺われる。

弥生土壤SK5130出土土器 (fig.13, 1 ~ 6) 弥生時代後期の長頸壺6点、広口壺1点、甕3点がある。土壙の中層と上層とから出土したが、土器に層位による差異はない。長頸壺には器高が25cm前後の小型品(1~3)と、34cmを越える大型品(6)がある。小型の長頸壺は頸部径と体部径との比率(頸部径/体部径×100)が62.2~66.7であり、口縁端部に面を持つもの(2)と丸くおさめるもの(3)がある。外面調整はハケメのちナデで、ナデを省略するものがある。

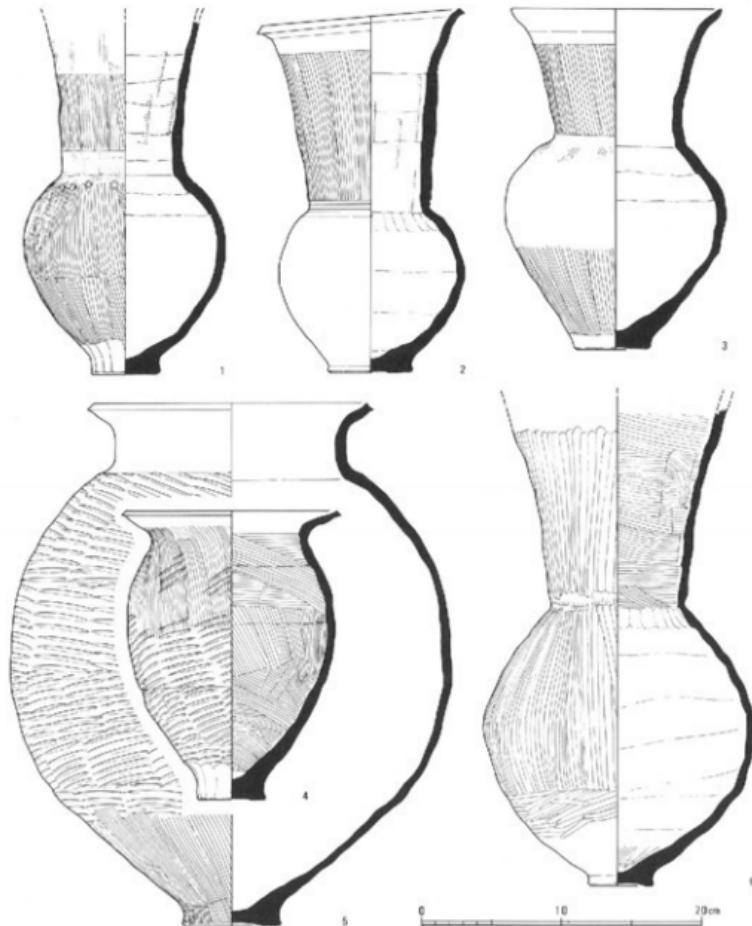


fig.13 出土土器実測図 IV (SK5130 1/4)

内面はナデで、頸部にはハケメのあたりがある。文様は頸部と体部の境に刺突竹管文(1)やヘラ描直線文(2)を1、2周めぐらせる。大型の長頸壺(6)は頸部径と体部径の比率が49.0で、外面はハケメのあとヘラ磨きを施し、内面には頸部にハケメが残る。壺にも器高が20.2cmの小型品(4)と、37.2cmの大型品(5)がある。大型壺の内面は摩滅していてハケメがかすかに見えるだけで、外面は叩き目のあと下半にハケメを施す。小型壺(4)も内面はハケメで、外面の上半にハケメがある。これらの土器群は樋原市四分遺跡の溝SD666中層出土土器に最も近く、畿内第V様式の西ノ辻E・D式にはほぼ相当し、第V様式前半期に位置づけられる。

陶硯 (PL. 8, fig.14) 円面硯の脚部片が2点ある。1は大きく外反する脚で、中程にめぐる2条の沈線より上に長方形の透かしを入れる。硯面部の形状不明。脚端径30cmに復元される。灰白色の胎土に灰緑色の自然釉がかかる。SD5111出土。いま一点(PL. 8)は断面長方形の脚端で三角形に削り出した脚がつく。径25.4cm、20脚に復元される。東区の灰褐色土層出土。

土馬 (PL. 8, fig.14) 頸部から胴部の破片。鞍をつくる以外に表現はない。SD5111出土。
轔羽口 SD5110とSD5118とから数点出土した。ともに鉛錆が伴出している。

形象埴輪 (PL. 8, fig.14) 大刀形の鞘部と把縁の破片。把縁の突起が折損しているが、2条の沈線で鞘口を表す。鞘部の剥離痕跡から武人が佩用していたことがわかる。SD5111出土。

2. 屋瓦

軒平瓦1点のほか、丸・平瓦片が約60片ある。SD5110・5111上層および灰褐色土層出土。
軒平瓦は、瓦当右端下半の小片で、内区は偏行唐草文、下外区は線鋸歯文。文様の特徴から、奈良国立文化財研究所が設定した型式番号では、6641-C型式にあたると思われる。青灰色で砂を多く含む。丸瓦には、凸面ナデ調整のものほかにハケメ調整のものがある。また、粘土組成形を確認できる破片があり、胎土・色調から樋原市飛騨町の日高山瓦窯所産と思われる。平瓦には、凸面に繩叩き目の残るものとナデ調整、ハケメ調整のものがある。いずれも藤原宮所用瓦である。

3. 銭貨 (PL. 8, fig.15)

和同開珎銀銭 調査区北端の東一坊大路西側溝SD5111内の西岸に近い砂層から3枚まとめて出土したが、上下2層に大別される側溝埋土のうちのいずれであるかは限定できなかった。

銀銭は、いずれも鋳上がりがよく、銘文も細く鮮明で、黒灰色を呈する。外縁の表裏には細かな鱗目がかすかに

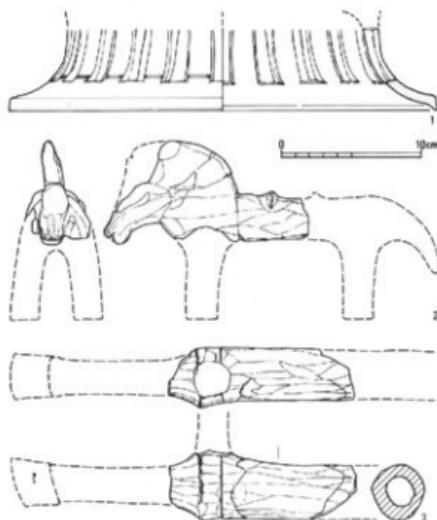


fig.14 出土遺物実測図(陶硯・土馬・埴輪 1/4)



fig.15 和同開珍銀銭拓影(1/1)

見られ、側縁の鍔かけによって生じた「まくれ」がのこるものがある。いずれも外縁の幅が広く方形孔は小振りで、字体は「開」を「間」にづくり、いわゆる不隸開の「古和同」である。字形はそれわずかに異なっており、裏面に範割れの痕のあるものがある。法量は外縁外径が23.90—24.10mm、外縁の厚さ1.71—1.92mmで、重量は6.374—6.465gである。

和同開珍銀銭の初鋳年については、『統日本紀』の和銅元年(708)5月「始めて銀銭を行なう」の記事にあてるのが通説である。しかし、この記事には形状や銭文についての記載がなく、また、それ以前の天武12年(684)にも、銀銭の使用に関する詔のあることから、天武朝とする説もあり、さらに、銭文に「開」を「間」にづくりの「隸開」と「間」につくる「不隸開」とがって、前者を新しく、後者を古く考える見解などもあり、なお確定的とは言えないのが現状である。

藤原京は持統8年(694)から和銅3年(710)までの都であり、藤原京での和同開珍の出土は初鋳年をめぐる論争に手掛かりを与えるものとして注目されるところである。しかし、今回の出土地である条坊道路側溝は、藤原遷都以前、天武朝にはすでに施工されていたものと考えられており、また、その廃絶は和銅3年の平城遷都以後のことである。したがって、条坊道路の存続期間と初鋳年諸説との関係は甚だ微妙なものであり、そこには様々な可能性が想定される。本例は平城遷都後ほどなく埋められたと推定される条坊側溝からの出土であり、初鋳年に最も近い時期に埋没したことの知れる例として貴重であるが、初鋳年を確定するには至らない。

和同開珍銀銭の出土例は、枚数や出土状況の判然としない2遺跡を除くと、我が国では東は千葉県から西は大阪府までの18遺跡32枚が知られている。その大半は奈良県下出土で、ほかに中国長安興化坊穴藏の5枚がある。遺跡の性格では、1遺跡で最も多量に出土した小治田安万呂墓例のように火葬墓が多く、他も建物の鎮壇や祭祀の場からの出土であっていずれも埋納された遺物である。今回の銀銭の出土土地周辺には、埋納と思われる形跡はなく、道路側溝への具体的な埋没状況は明らかでないものの、銀銭流通の実態を窺わせる重要な資料といえよう。

番号	外縁外径G	外縁内径g	内郭外径N	内郭内径n	外縁厚T	文字面厚t	重量(g)	備考
1	23.90	18.75	6.53	5.03	1.71	1.14	6.374	裏面外縁にヒビあり
2	24.10	19.56	6.65	5.10	1.92	1.20	6.394	裏面文字面に範割れ痕
3	23.94	18.76	6.65	5.40	1.76	1.13	6.465	

tab. 2 和同開珍銀銭法量表 (各部の測点は『平城宮発掘調査報告』VIに準拠。単位はmm)

IV まとめ

今回の調査成果には、まず、東一坊大路の検出があげられる。藤原宮域北方の2条8坊分には、苑池や典薬寮関連施設の存在が想定され、条坊の施工も疑問視されることがあったが、その地で条坊道路を確認したことは大きな成果である。いま一つには、宮北方の坪内で小規模ながらも計画的に配置された建物遺構を検出したことがあげられ、宮北方の坪内の利用形態を知るうえで貴重な資料を得ることができた。また、典薬寮に関連するとみられる遺構は確認されず、関連を示す物証も得られなかった。小字「テンヤク」には、今回の調査地である「天業」の北に「大役」と表記される坪がある。今回の調査地を含めて、中世に朝廷が課した公事のことである「天役」の賦課された土地として小字に名が残ったことも考慮しなければならないであろう。しかし、現状では、宮域北方に苑池や典薬寮関連施設が存在するとした仮説を否定する材料も無いのであって、仮説はこの地域の性格を解明するうえで、なお考慮すべき課題として残されている。以下、今回の成果をまとめて、検討すべき問題点に触れておくことにする。

条坊遺構 今回検出した東一坊大路SF5100は、規模や埋土の特徴が類似する2条の南北溝SD5110、SD5111を両側溝とする道路と考えられ、両側溝心々間の距離が8.6m、検出面での路面幅は6.4mであり、一条大路の規模に類似する。

調査区中央では、この2条の溝にSD5115・5155を加えた4条が並走しており、二条二坊西北坪内のSD5115については、東西溝SD5112を介した重複関係からはより新しい時期の溝であるが、SD5112の廃絶が早ければ、側溝と併存する時期が存在しうる。その場合、敷地の外側を仕切る溝にあたると考えられ、二条一坊東北坪内のSD5155と同じ機能をもつことになる。

東一坊大路については、本調査区の南500mに位置する藤原宮第38次調査地¹で、宮内先行条坊道路SF3499として検出している。そこでは溝心々間の距離が約16mにある2条の溝SD3501・3502を両側溝としており、今回の調査で確認した幅員とは一致しない。藤原京において、京城で検出した道路と宮域内で検出した先行条坊道路とで幅員の異なる例としては、朱雀大路の場合があげられ、条坊道路施工段階にすでに宮城の位置が考慮されていたことを示唆する事実とも考えられており、東一坊大路をその一例とすることもできる。しかしながら、第38次調査地では、西側溝SD3502の東8.6mの位置にいま1条の南北溝SD3504があり、宮造當直前の時期の溝と考えられている。この溝を東側溝とみれば、今回検出した道路の道幅と一致するが、溝幅が狭い点で問題があり、彼我の間を確認しない現状ではそのいずれとも決し難い。

第38次調査の西側溝SD3502と、今回の西側溝SD5111とを結ぶ線を同上方眼座標上で検討すると、その方眼北に対して西へ約1°振れている。今回の調査区内でもSD5111は西へ1°あまり振れており、この側溝および道路の振れが、宮の南北中軸線や、他の条坊道路の振れよりも大きいことが考えられる。その要因としては道路の施工誤差や、設定基準あるいは時期の相違の反映など、さまざまな可能性が想定され、藤原京造営の実態に迫る手掛かりとして興味深いものの、南北大路の振れが確認できる資料に乏しく、今後の調査の進展を待って検討したい。

坪内の利用形態 左京二条二坊西北坪、同一坊東北坪内の遺構は3期に大別される (fig.16)。

1期の遺構は飛鳥Ⅳ期には存在しており、天武朝に施工されたとみられる条坊と併存する可能性がある。総柱建物や比較的規模の大きい建物で、宮造営直前のこの地域の性格を窺う上で興味深い。

2期には二条二坊西北坪で、小規模ながら計画的な配置がなされる。その配置を、検出した道路からの距離をもとに検討すると、まず、南北溝SD5118は東側溝SD5110の東岸から29.6mの位置にあり、溝心々間では30.4mとなる。これは、大尺375尺に復元される条坊道路心々間の距離から道路分を差引いた坪内有効敷地東西幅の約に近い数値である。SD5118は調査区の南端から始まる溝で、堀割としての機能が窺われ、この溝によって坪の東西幅の約3分の1を区画したものと考えられる。その区画内の南半にはほぼ中央に3棟の南北棟建物があり、柱筋を揃えて建てられるが、東西塀SA5109を介した北側には東に庇のつく建物SB5105が配され、南の建物群とはやや性格を異なる

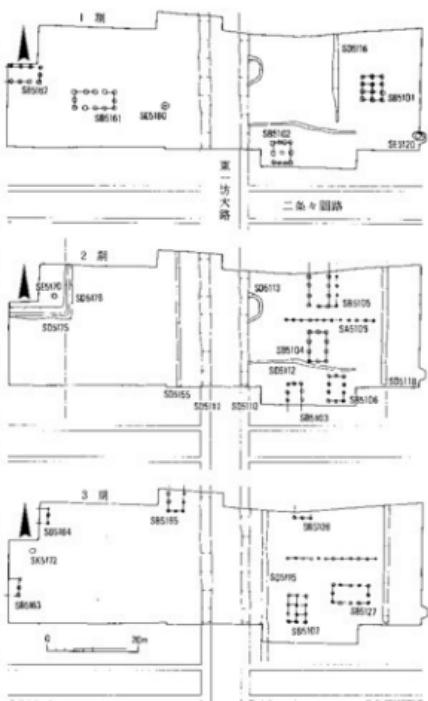


fig.16 時期別遺構配置図

ものとみられる。東西塀SA5109は溝で区画されたこの敷地内を性格の違いによって仕切る塀と考えられる。二条一坊東北坪内には、逆L字形に曲る溝SD5175・5176があり、その東西溝SD5175の南岸は東西塀SA5109の延長線上に位置する。また、南北溝SD5176の位置は、西側溝SD5111の西30.2mにあっておよそ坪の約3分の1にあたっている。つまり、この坪も大路東の二条二坊西北坪と同様の規格で、溝によって区画されているのである。二条一坊東北坪内は削平が著しく、明らかでない点も多いが、これらの溝は区画の東南部にあたり、溝と道路側溝との間は空閑地であったとみられる。その点では二条二坊西北坪とは異なる利用形態が想定されるのである。

今回の調査では2坊分以上にわたる敷地は確認されず、1坪内を溝によって細かく区画していることが明らかになったが、それぞれ1坪の10%にも溝なし範囲の調査であり、このような区画が坪全域を4分あるいは8分した敷地であることを示すものか、あるいは1坪敷地の中での区画にあたるものなのかを明らかにするには至らなかった。今回の調査地を含む藤原宮の北方地域の実態はほとんど明らかになっていないが、近年、この地域における開発はますます著しく進行しており、発掘調査による解明は急務の課題であるといえよう。

1. 奈良国立文化財研究所『藤原宮第38次調査』『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』15 1985.4



空中写真(東南から)

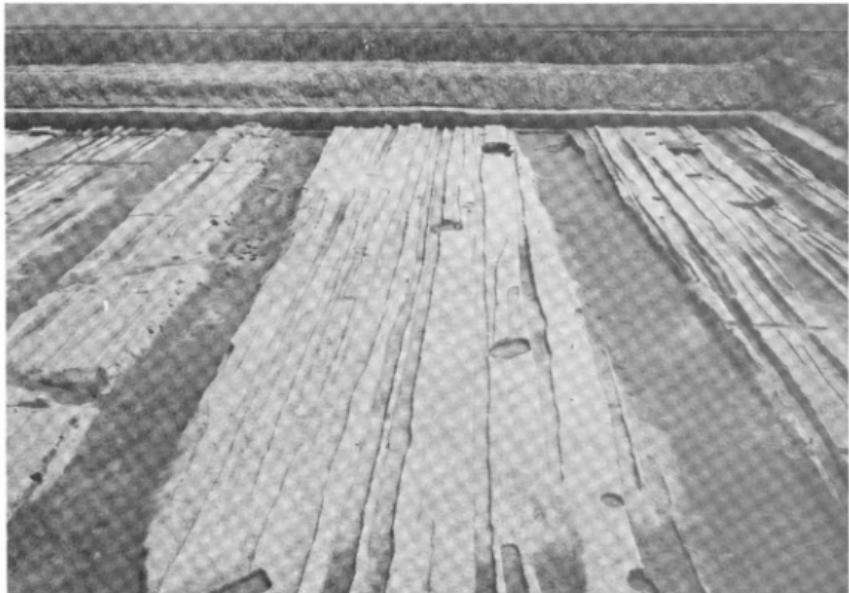
PL. 2 全景



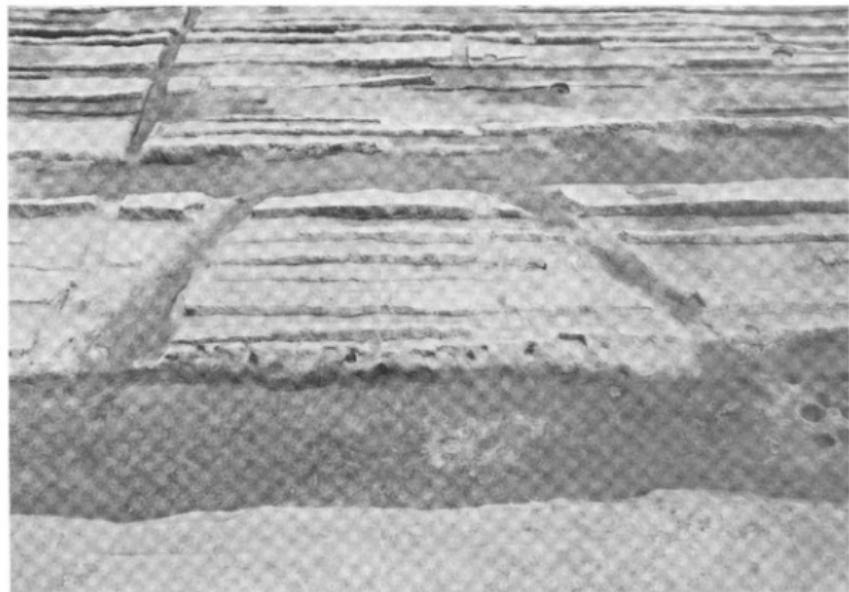
1. 西区全景(東から)



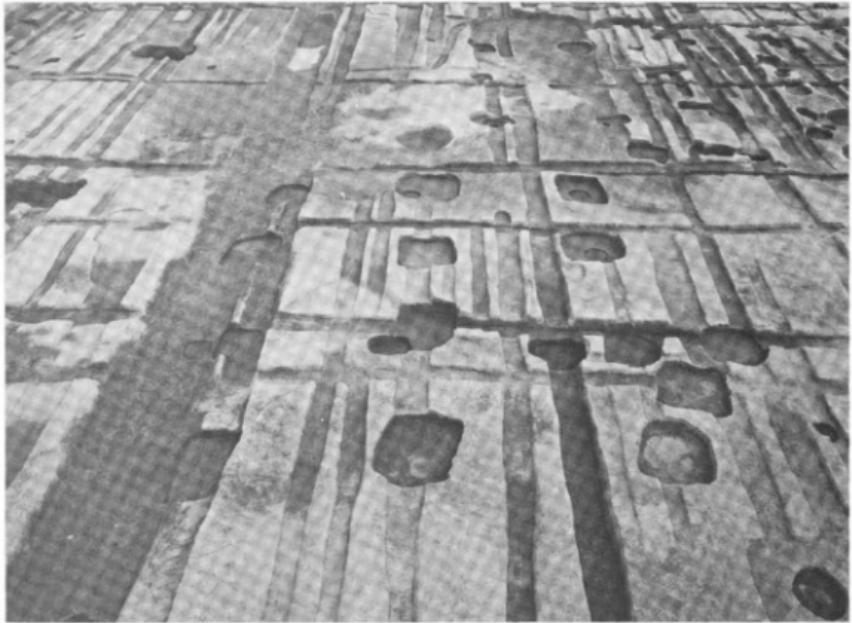
2. 東区全景(東から)



1. 東一坊大路 SF5100(北から)



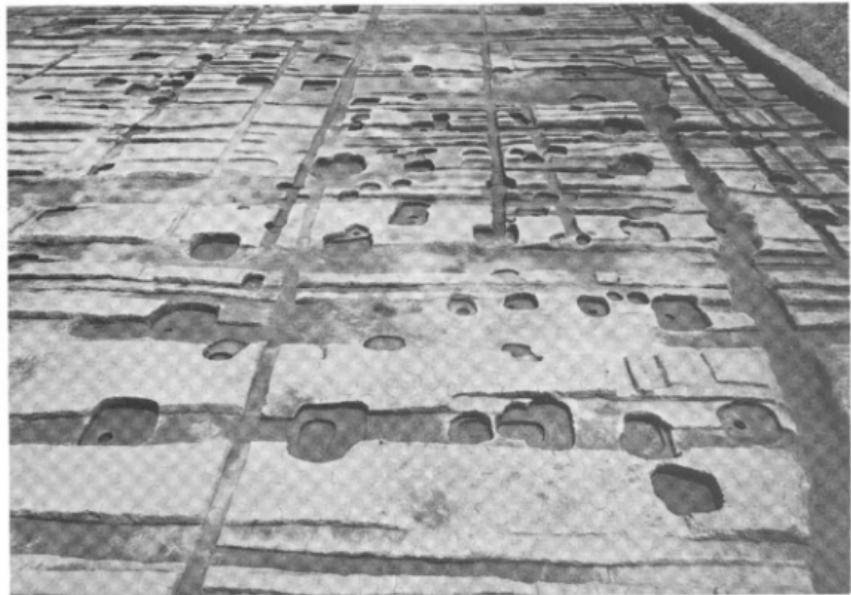
2. SD5110, SD5113(西から)



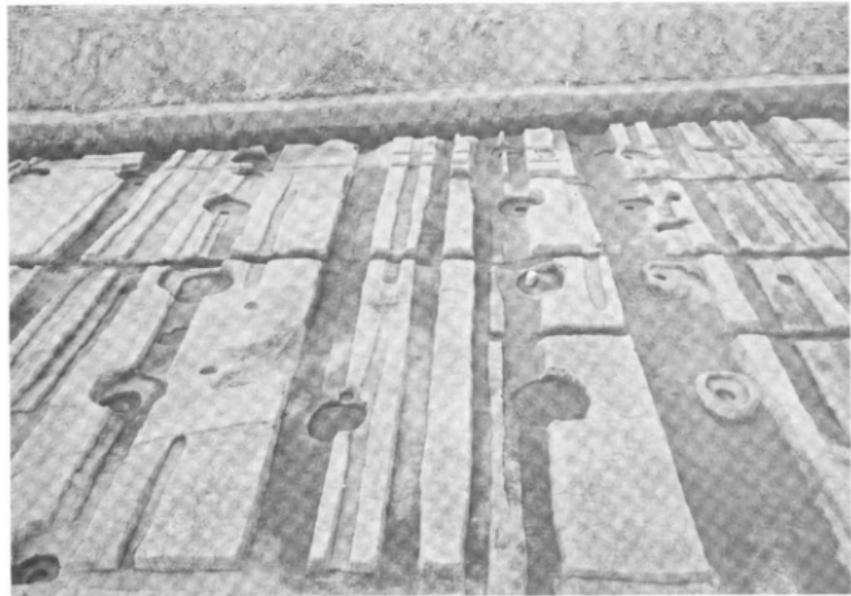
1. SB5101(北から)



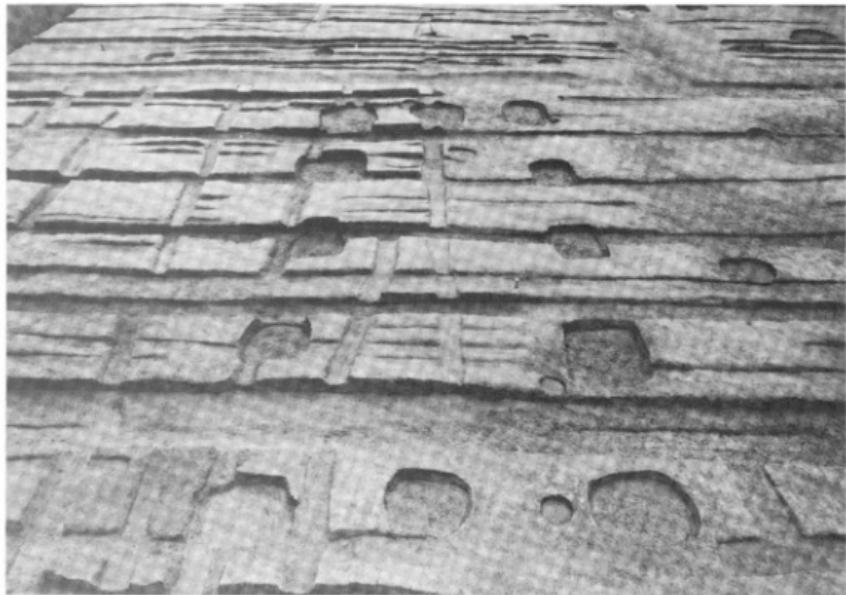
2. SB5102(北から)



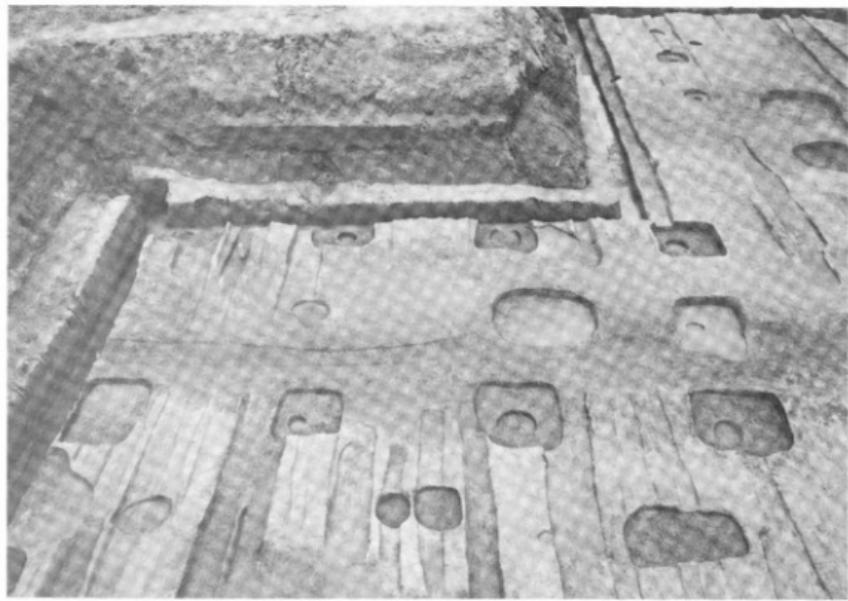
1. SB5104(西から)



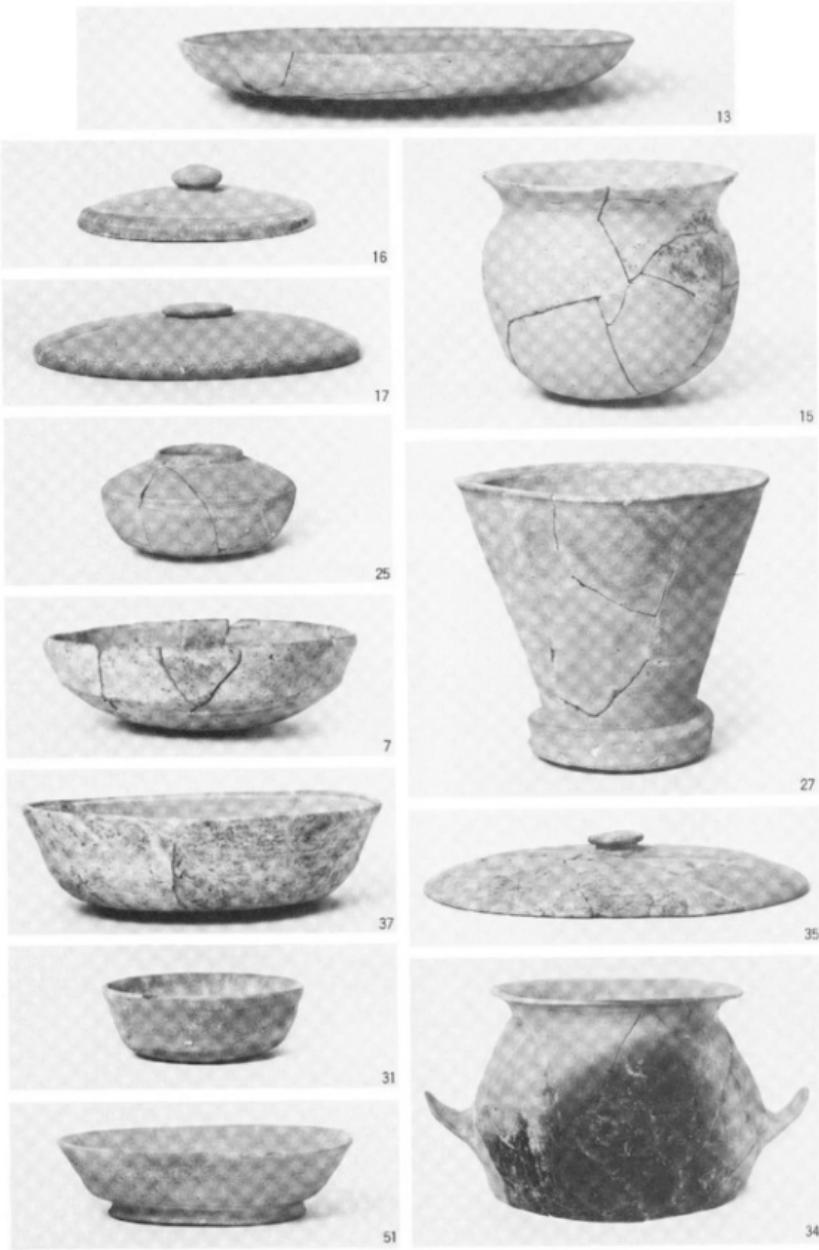
2. SB5105(南から)

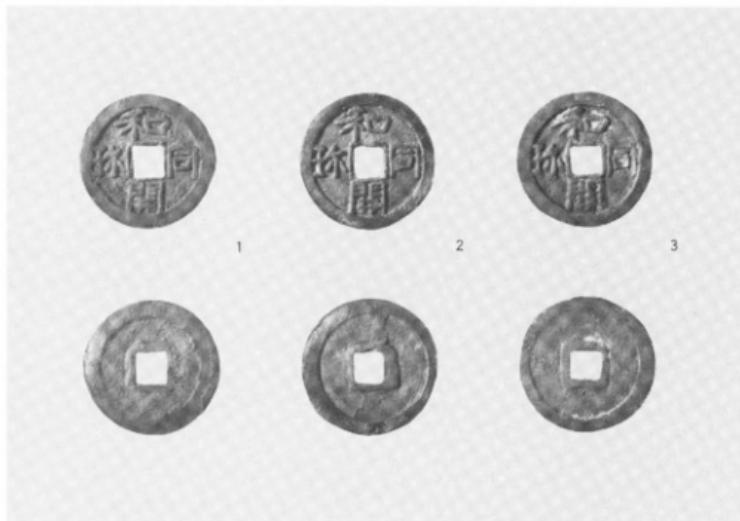


1. SB5161(東から)



2. SB5162(南から)

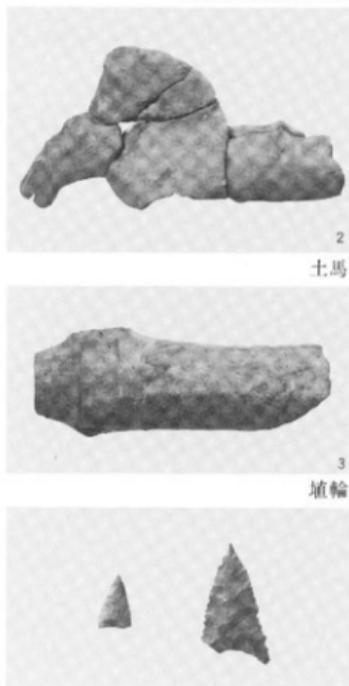




和同開汎銀錢(1/1)



陶硯



土馬

埴輪



石鏃

藤原京左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告
昭和62年3月31日発行

編集 奈良国立文化財研究所

奈良市二条町二丁目9番1号

TEL. (0742)34-3931(代)

発行 奈良県教育委員会

奈良市登大路町8

TEL. (0742)27-1101(代)

印刷 共同精版印刷株式会社

奈良市三条大路二丁目2番6号

